

頸部リンパ節結核の11例

石川 雅洋 村田 清高

近畿大学耳鼻咽喉科学教室

田辺 正博

大阪赤十字病院耳鼻咽喉科気管食道科

ELEVEN CASES OF TUBERCULOUS CERVICAL LYMPHADENITIS

Masahiro Ishikawa, Kiyotaka Murata

Department of Otolaryngology, Kinki University School of Medicine, Osaka.

Masahiro Tanabe

Department of Otolaryngology, Osaka Red Cross Hospital, Osaka.

ABSTRACT

The number of patients with tuberculosis has recently decreased. Of all extrapulmonary tuberculosis, glandular tuberculosis is most frequent. Cervical lymph nodes are involved in 70%—90% of the patients. For the past three years (from the beginning of January, 1991 to the end of December, 1993), 11 cases of tuberculous cervical lymphadenitis were encountered at our Department and at the Department of otolaryngology, Osaka Red Cross

Hospital. The local symptoms found at first examination consisted of painless swelling (10 cases), adhesion to surrounding tissues (7) and poor mobility (7). Differentiation from cancer was difficult. The disseminated type was most frequent (8 cases), and this finding agreed with those of other investigator. Lateral cervical lymph nodes were the major site of the lesions. In two patients with parotid tuberculosis, differentiation from malignant parotid tumor was difficult.

緒 言

近年、結核症は減少傾向にある。国民衛生の動向¹⁾によると、全結核の罹患率は昭和36年は人口10万対445.9、昭和40年は、309.9、昭和50年は、96.6、昭和60年は、48.8、平成3年は、40.8となっている。このように新登録患者数は、年々減少しているものの、昭和60年ころより、結核罹患率の減少速度に純化傾向がみられており、特に39歳以下で顕著で

あると報告されている。

リンパ節結核は肺外結核のうちでは最も多く、頸部が70~90%を占める²⁾。

頸部リンパ節結核について最近の我々の経験を過去の報告と比較しながら報告する。

対 象

対象は、平成3年1月初めから平成5年12月おわりまでの過去3年間に近畿大学医学部附属病院耳鼻咽喉科と大阪赤十字病院耳鼻咽

喉科で経験した頸部リンパ節結核11例について検討した。

結 果

1. 年齢性別分布

Fig. 1 に年齢性別分布を示す。男性4例、女性7例で、平均年齢は、48歳であった。41歳以上が8例、73%を占めた。

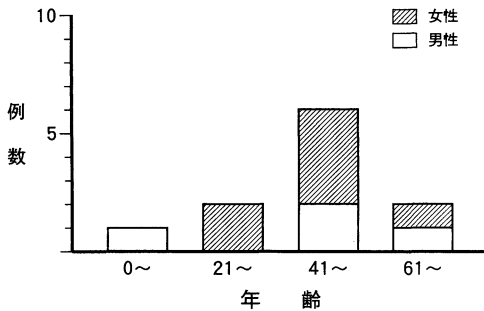


Fig. 1 Age and sex

2. 初診科

Table 1 に11例の初診科を示す。他科が11例中7例であった。内科4例のうち3例は、耳鼻咽喉科に頸部リンパ節の試験切除を依頼され、頸部リンパ節結核と診断されたものである。

内 科	4 例
耳鼻咽喉科	4 例
外 科	2 例
歯 科	1 例

Table 1 The divisions of the first examination

3. 初診時の主訴と局所症状

Table 2 に初診時の主訴と局所症状を示す。無痛性腫脹が10例、周囲組織との癒着を認めるものが7例、可動性の悪いものが7例であった。

4. 頸部リンパ節腫脹の性状

Table 3 に、頸部リンパ節腫脹の性状を示す。散在型が8例と多かった。簇生は1例に

無痛性腫脹		10 例
有痛性腫脹		1 例

周囲組織との癒着	有	7 例
	無	4 例

可動性	良好	4 例
	不良	7 例

Table 2 Chief complaints and local symptoms at the first examination

単 独	2 例
散 在	8 例
簇 生	1 例

Table 3 Types of the lymphnode swellings in the neck

認めた。

5. 病変の主在部位

Table 4 に病変の主在部位を示す。合計が11例より多いのは、散在型が多く罹患部位を一ヶ所に限定できなかったため重複しているためである。側頸部リンパ節腫脹が8例と多かった。

側頸部リンパ節腫脹	8 例
顎下部リンパ節腫脹	3 例
耳下部リンパ節腫脹	2 例
鎖骨上窩リンパ節腫脹	2 例
オトガイ下リンパ節腫脹	1 例

Table 4 Major sites of the lesions

6. 胸部レントゲン所見、ツベルクリン反応

Table 5 に胸部レントゲン所見を示す。正常範囲内が11例中8例であった。

ツベルクリン反応は、11例中9例が強陽性、2例が陽性であった。

7. MRI 所見

Fig. 2 に57歳男性、左耳下部から側頸部に

	ツ反強陽性	陽性	計
正常範囲内	7	1	8例
右上肺野活動性病変	1	0	1例
陳旧性結核病変	1	1	2例
	9例	2例	11例

Table 5 Chest roentgen findings and tuberculin reactions

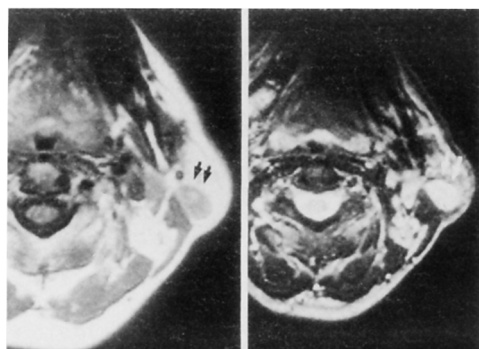


Fig. 2 Magnetic resonance images

かけての頸部リンパ節結核のMRI所見を示す。左がT₁強調像で、耳下腺内に境界の比較的明瞭な等信号像を認めた。右が同症例のT₂強調像で、耳下腺内の同じ部位に高信号像を認めた。

考 察

1. 年齢性別分布

京大結核胸部疾患研究所の昭和43年から57年までの泉らの集計では²⁾、41歳以上が25%、昭和11年の本邦報告例集計成績では4%であった。41歳以上の頸部リンパ節結核が増えていると考える。

亀田らは³⁾、リンパ節結核が女性に多いことは、極めて特徴的と述べているが、我々の結果でも11例中7例と女性に多かった。

2. 初診料

Table 1に示すように、初診では他科の医師が診ることが比較的多い。頸部リンパ節腫張を来す鑑別疾患の中に結核が存在することを再認識する必要がある。

3. 初診時の主訴と局所症状

局所の理学的所見で周囲組織との癒着を認めたり、可動性の悪いものが11例中7例に認められた。このような場合、癌との鑑別が重要となる。原発巣不明の癌の転移を疑い、頸部リンパ節を試験切除し、病理組織検査で初めて結核と診断されることも少なくない。このような例が11例中3例あった。頸部リンパ節結核の術前診断の難しさを痛感させる。

4. 頸部リンパ節腫張の性状

散在型が8例と多いのは諸家の報告²⁾に近い結果であった。昭和11年の本邦報告例では⁴⁾、簇生が24%であったが、昭和43年から57年までの泉らのデータでは、16例中1例も、簇性を認めなかった²⁾。簇生は、成書に数珠状に連続して癒着し連なっている硬いリンパ節の塊と記されている結核に特徴的な所見ではなくなっているが、今回の集計で、1例に簇生を認めた。頸部リンパ節結核の重症化の徴候として注意を要すると考える。

5. 病変の主な部位

側頸部リンパ節腫張が8例と多いのは、過去の報告²⁾とほぼ一致していた。耳下部が、泉ら²⁾の16例では0例で、大石ら⁵⁾の21例の報告では、1例と概して少ないが、我々の集計では2例に認めた。その2例とも耳下腺悪性腫瘍との鑑別が困難で診断に苦慮した。

6. 胸部レントゲン所見、ツベルクリン反応

一般に、頸部リンパ節結核は胸部レントゲン検査では異常のない事が多いといわれている。我々の集計でも11例中8例が正常範囲内であった。

ツベルクリン反応は11例中9例が強陽性、2例が陽性であった。しかし、日本における20歳代のツ反陽性率は約80%であり⁶⁾、ほとんどの人が感作されているので、ツ反陽性率の診断的価値はそれほど高くはないと考える。

7. MRI所見、その他

頸部リンパ節結核のMRIについての報告

は少ないが、戸塚らは⁷⁾、耳下腺の腺内腫瘍と腺外腫瘍の鑑別にMRIが有用であったと述べている。我々の症例のMRI所見では、T₁強調像、T₂強調像のいずれの撮像法でも耳下腺腫瘍との鑑別は困難であった。本例も頸部リンパ節の試験切除で結核の診断を得たが、悪性腫瘍との鑑別が難しかった症例である。

また、大石らは⁵⁾、頸部リンパ節結核21例中3例に頭頸部悪性腫瘍との合併が認められたと報告している。我々は経験していないが、頸部リンパ節結核と診断されても癌の否定材料にならないことになり、さらに慎重な対応が望まれる。

ま と め

1. 従来、結核の特徴的所見として、数珠状に連続して癒着し連なっている硬い頸部リンパ節の塊、と記されていた典型例は少なかった。
2. 頸部リンパ節局所の理学的所見から結核と癌との鑑別は困難であった。

3. 従来、報告通り胸部レントゲン検査は正常範囲内の事が多かった。

参 考 文 献

- 1) 国民衛生の動向, 8. 結核163-168頁, 1993.
- 2) 泉 孝英, 北市正則: 頸部リンパ節結核 耳喉頭頸 55: 873-879, 1983.
- 3) 亀田和彦, 他: 頸部リンパ節結核の検討. 結核 60: 2, 59-64, 1984.
- 4) 福岡善次郎: 結核性頸部リンパ節炎の統計的観察. 結核 14: 292-314, 1939.
- 5) 大石公子, 他: 当教室12年間の頸部リンパ節結核の臨床統計的観察. 耳鼻臨床 79: 4; 609-616, 1986.
- 6) 青柳昭雄: 抗酸菌感染症. 耳喉 52: 805-810, 1980.
- 7) 戸塚元吉, 他: 頸部リンパ節結核の3症例. JOHNS 8: 7; 1063-1066, 1992.

質 疑 応 答

質問 鈴木賢二 (名市大)

針生検の有用性につき御教示下さい。

応答 石川雅洋 (近畿大学)

FNAは、3例に施行しましたが結核菌の証明にはいたりませんでした。